修士論文（要旨）
2018 年 7 月

日本語学習における「能動的先延ばし」を活用する学習スタイル
－中国人日本語学習者 N のライフストーリーから－

指導　齋藤　伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
216J3902
繆　鳴謙

Master's Thesis(Abstract)
July 2018

A Learning Style Making Use of "Active Procrastination" in Japanese Language Learning: From the Life Story of a Chinese Japanese Language Learner

MIAO MINGQIAN
216J3902
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor:Nobuko Saito

目次

第 1 章　はじめに 1
1　研究背景と目的 1
第 2 章　先行研究 3
2.1　動機づけの定義 3
2.2　動機づけの分類 3
2.3　先延ばしの定義 5
2.4　先延ばしの適応的な側面（能動的先延ばし） 6
2.5　能動的先延ばし尺度 7
2.6　先延ばしの安定性 8
2.7　先延ばしの時点 8
第 3 章　本研究における動機づけと先延ばしの関連 10
3.1　先延ばしと動機づけ 10
3.2　本研究における先延ばしの「時点」 10
3.3　先延ばし概念に適応する動機づけの分類 10
3.4　リサーチクエスチョン 12
第 4 章　研究方法と調査対象 13
4.1　研究方法 13
4.2　調査対象 13
第 5 章　調査結果の分析 16
5.1　N の日本語学習ストーリー 16
5.2　N の動機づけと先延ばしに関する意識 18
5.2.1　1 年生の時 [図 3-1(a)、図 3-1(b)] 18
5.2.2　2 年生の時 [図 3-2(a)、図 3-2(b)] 22
5.2.3　3 年生の時 [図 3-3(a)、図 3-3(b)] 28
5.2.4　4 年生の時 [図 3-4(a)、図 3-4(b)] 32
5.3　「能動的先延ばし」のメリット 34
第 6 章　考察 37
6.1　能動的先延ばし使用者Nにおける動機づけの特徴 37
6.2　「能動的先延ばし」のメリット 40
第 7 章　おわりに 41

参考文献

先延ばしとは、目の前にやるべきことがあるにも関わらず、そのことに取り組まないといった身近な現象であり、学習場面で起きることが多い。大学生のほとんどが経験したことのある（Ellis & Knaus,1977)先延ばしは、大学で日本語を学習する人の多い中国の日本語学習者の間でも普遍的に存在する可能性が高い。従来、先延ばしは否定的に捉えられ、課題への支障などネガティブな影響が強調されている（小浜,2010 など)。しかし、稿者の知り合いの中で、全くその悪影響を受けないように、むしろ逆に先延ばしを利用しているように課題を次々と達成していく、先延ばしを常に行う日本語学習者がいる。この現象は「能動的先延ばし」(Chu&Choi,2005)と呼ばれ、意図的に先延ばしを行うことで、気晴らしの機能が働き学習行動を促す効果を持つ適応的な側面である。このような先延ばしはそれに関する研究（吉田,2016a など)はまだ主流になっていないため､能動的先延ばしを積極的に考察する研究が必要である。さらに、先延ばしは個人特性と深く関連している（増田,2010)ことによって、「個人」に注目する質的研究が必要である。従って、「能動的先延ばし」使用者の経験から考察するのが妥当だと思われる。

先延ばしは、学習者の持つ動機づけと関連している（藤田,2005 など)。実際、学習者の自律性によって、動機づけは「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」に大きく別れる。「内発的動機づけ」と先延ばしは負の相関を持つ（藤田・仲澤,2005)ことに対して、小浜・松井（2007)は先延ばし過程には「外的理由による先延ばし」という。動機づけの自己決定性の視点から先延ばし行為を観察するのは新しい試みとして、本稿は動機づけを段階的に分類した「有機的統合理論」の枠組みを使用する。

本研究では、日本語学習における「能動的先延ばし」使用者 N の経験をもとに、その学習プロセスにおける動機づけの段階と先延ばしの意図性の有無に注目し、学習者の行動選択に至る意識を質的方法で分析し考察する。「能動的先延ばし」使用者 N の動機づけにおける個性を解明することによって、これから「能動的先延ばし」に関する研究が「個別性」への注目を喚起すること、または先延ばしをネガティブにしか考えていない人が先延ばしを見直すことが期待される。

時間軸に沿って調査対象の経験を観察するには、本研究は先延ばし行為の発生と完了を区切りとして､「先延ばし開始時点」と「先延ばし終了時点」の概念を提示した。また､「有機的統合理論」の段階概念を参考にし、先延ばしと正の相関を持つ「外発的動機づけ」を再分類し､「自律的外発的動機づけ」(「同一化的調整」､「統合的調整」）と「他律的外発的動機づけ」(「外的調整」､「取り入れ的調整」）の概念を提示した。

本研究の調査はライフストーリーの手法を使用し､「能動的先延ばし」を実際の行動と意識の両面から捉え測定する「能動的先延ばし尺度」（吉田, 2017）の項目に沿った内容を一部使用し「能動的先延ばし」使用者 N にインタビューをした。インタビューの内容をデータとして､「動機づけの段階」と「先延ばしの意図性」の両方の視点から N の日本語学習プロセスを分析した。学年ごとの学習プロセスを対照することによって、以下の結論を得た：

・能動的先延ばし使用者Nにおける動機づけは､「先延ばしを行うかどうかと関係なく、他律的外発的動機づけによって行動する場合、動機づけが高い」､「先延ばし終了時点での動機づけは常に高い」､「動機づけの切り替えが得意」､「目標が達成され次第学習放棄に移る」という四つの特徴を有する。

・能動的先延ばし使用者Nにとって、能動的先延ばしは、「気分の切り替え」、「動機づけの増強」と「集中力の向上」の三方面のメリットを持っている。

これらの結論から、他律的な動機づけを意図的に活用する学習プロセスが見えてきた。従来否定的に捉えられた先延ばしは、能動的先延ばし使用者 N の手によって効果的な学習スタイルになった。今後の先延ばしに関する研究はもっと「個別性」に注目する必要があると考えるに至った。また、学習場面が異なることによって生じる先延ばしの適用の仕方の違いは今後の課題となる。さらに、本研究の対象者 N は豊かな家庭環境で育てられ、一般の人が持っていない経験をした学習者であることから、「能動的先延ばし」使用者は特定の条件で育成できるかという疑問が生じた。今後もしこのことに関する研究が進めると、「受動的先延ばし」をする者を「能動的先延ばし」使用者に変えるなど、「能動的先延ばし」のメリットがもっと多くの学習者に共有できる可能性がある。

参考文献

磯田 貴道（2005)「学習意欲や動機づけに関する概念の整理へ向けて」『広島外国語教育研究』8, 85-96

伊田 勝憲（2015)『「擬似内発的動機づけ」の概念化可能性を探る：自律的動機づけ形成のデュアルプロセスモデル構築』『静岡大学教育学部研究報告』人文・社会・自然科学篇, 65, 139-150

小川内 哲生（2017)「学業的延引行動に関する発達心理学的研究」兵庫教育大学院連合校研究科学校教育学博士論文

小川内 哲生・龍 祐吉（2013)「学業的延引行動に及ぼす動機づけ，学習方略の影響」『尚絅大学研究紀要』A，人文・社会科学編（45), 85-94

大西 由美（2014)「日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に」北海道大学大学院博士論文

黒田 卓哉・望月 総（2012)「なぜ“しなければならない行動”がなされないのか？：先延ばし，自己制御，意思決定の観点から」『筑波大学心理学研究』（43), 83-95

黒田 卓哉・望月 総（2013)「大学生における典型的先延ばし場面」『筑波大学心理学研究』(46), 97-106

黒田 卓哉・望月 総（2014)「意図的に先延ばす者たち」日本心理学会第 78 回大会

小浜 駿（2007)「先延ばし過程における意識および感情の探索的検討（3)」『日本心理学会第 71 回大会発表論文集』, 940

小浜 駿（2010)「先延ばし過程で自覚される認知および感情の変化の検討」『心理学研究』2010 年, 81 (4), 339-347

小浜 駿・松井 豊（2007)「先延ばし過程における意識の変化の探索的検討」『筑波大学心理学研究』（34), 27-35

桜井 厚（2012)『ライフストーリー論』弘文堂 現代社会学ライブラリー

櫻井 茂男（2009)『自ら学ぶ意欲の心理学―キャリア発達の視点を加えて』有斐閣

櫻井 茂男（2017)『自律的な学習意欲の心理学―自ら学ぶことは、こんなに素晴らしい』誠信書房

新垣 紀子・都築 幸恵（2016)「大学生の動機づけパターンが生活スタイル・満足度・職業価値観に与える影響」『社会イノベーション研究』11 (1), 159-178

辰野 千寿（1989)『学習スタイルを生かす先生』図書文化社

田中 希穂（2017)「学習動機と自己効力感が学習行動におよぼす影響」『同志社大学教職課程年報』（7), 3-18

谷口 篤・鈴木 眞雄・安福 幸代（2013)「先延ばし行動と達成動機，自己効力感，及び性差の関係」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』49 (4), 1-12

中川 恵里子（2009)「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営研究』（34), 99-112

長谷川 孝子（2016)「日本語学習者のモチベーションに関する意識調査―L2 モチベーション研究のためのパイロットスタディ―」『日本語教育実践研究』第 3 号, 116-126

林 潤一郎（2007a)「General Procrastination Scale 日本語版の作成の試み―先延ばしを測定するために」『パーソナリティ研究』15 (2), 246-248

林 潤一郎（2007b）「先延ばしの安定性―General Procrastination Scale 日本語版の再検査信頼性の検討を通して―」『日本心理学会第 71 回大会発表論文集』278
林 潤一郎（2009）「先延ばし後の思考内容と感情の関連―先延ばし傾向に着目して―」『心理学研究』79 (6), 514-521
藤田 正（2005）「大学生の先延ばし行動と失敗傾向」『日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集』セッション ID: PC020
藤田 正・仲澤 和眞（2005）「先延ばし行動と失敗行動の関連について」『教育実践総合センター研究紀要』14, 43-46
藤田 正（2013）「中学生の学習課題先延ばし行動に及ぼす自己調整学習方略と達成目標の影響」『教育実践開発研究センター研究紀要』22, 101-106
藤田 裕子（2014）「学習者の内発的動機づけを高める授業実践の効果」『Obirin Today：教育の現場から』15, 73-88
増田 尚史（2010）「先延ばしに関する心理学的検討―個人特性と客観的・主観的遅延の関係―」『広島修大論集』51-1, 59-70
真嶋 潤子（2005）『学習者の個人差と第二言語習得--「学習スタイル」を中心に』第二言語としての日本語の習得研究（8), 115-134
松尾 大輔・菅 千索（2017）「大学生における先延ばし行動と性格特性の関係について」『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』67, 111-119
吉崎 聡子（2016）「自律的動機づけに関する有機的統合理論と基本的心理的欲求理論の統合的検証」弘前大学大学院地域社会研究科心理学博士論文
吉田 恵理（2016a）「自己制御能力が先延ばし行動に及ぼす影響の検討」『聖心女子大学大学院論集』38 (2), 94-112
吉田 恵理（2016b）「先延ばしに関連する認知的要因の検討－先延ばしの適応性に着目して－」聖心女子大学院文学研究科博士論文
吉田 恵理（2017）「能動的先延ばし尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『人間環境学研究』15 (1), 53-58
龍 祐吉（2017）「学業的延引行動に関する実証的研究―学業的延引行動の先行要因と否定的影響について―」兵庫教育大学学校教育学博士論文
和田 敏江・山本 洋之（2014）「自己効力感と成績との関係―入学前を含めた 1 年生の追跡調査より―」『理学療法科学』29 (4), 473-477
Chu, A.H.C., & Choi, J.N. (2005). Rethinking procrastination: Positive effects of “Active” procrastination behavior on attitudes and performance. Journal of Social Psychology, 145, 245-264
Choi, J. N. & Moran, S. V. (2009). Why not procrastinate? : Development and validation of a new active procrastination scale. The Journal of Social Psychology, 149, 195-212
Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination. New York: Plenum
Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). On assimilating identities to the self: A self-determination theory perspective on internalization and integrity within

cultures. In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.). Handbook of self and identity (pp. 253-272). New York: The Fuillford Press

Dornyei, Z. (2001a). Motivational Strategies in the Language Classroom. UK: Cambridge University Press

Dornyei, Z. (2001b). Teaching and Researching Motivation. England: Pearson Education Limited

Ellis, A., & Knaus, W. J. (1977). Overcoming procrastination. New York: Signet

Hill, M., Hill, D., Chabot, A., & Barrall, J. (1978). A survey of college faculty and student procrastination. College Student Personal Journal, 12, 256-265

Lay, C. H. (1986). At last, my research article on procrastination. Journal of Research in Personality. 20, 474-495

Park, S. W. & Sperling, R. A. (2012). Academic Procrastinators and Their Self-Regulation. Psychology, 3, 12-23

Solomon, L.J., & Rothblum, E.D. (1984). Academic procrastination: Frequency and cognitive - behavioral correlates. Journal of Counseling Psychology, 31, 503-509

Ushioda, E. (2001). Language learning at university: Exploring the role of motivational thinking. In Dornyei, Z., & Schmidt, R. (eds.). Motivation and Second Language Acquisition. Honolulu, Hawaii: Second Language Teaching & Curriculum Center University of Hawaii at Manoa